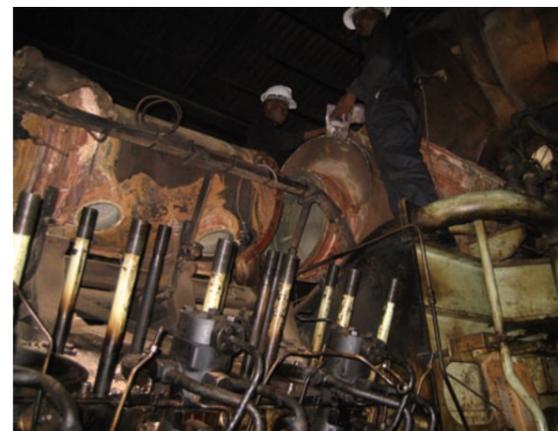


電気を安定的に供給するため、住民と協力して電柱を設置



新たな配電施設の設置についてNPAの職員と話し合う仁尾さん



維持管理が行われず動かなくなった発電機のエンジン

### 心の傷を癒やす 光の力

日本は世界で最も平均寿命が長い国。その一方で、最も短い国とされるのがアフリカ西部に位置するシエラレオネだ。

その背景には、この国の暗い過去がある。1991年、政府軍と反政府軍の間で内戦が始まり、約10年にわたり戦闘が続いた。約7万5000人の命が奪われ、約200万人が難民または国内避難民となった。

内戦は2002年に終結したものの、残されたのは荒れ果てた町。給水施設、病院、学校、発電所などは破壊され、夜になれば真っ暗。人々の心にも、暗い影を落としていた。

そんな国に、ある日、光が差し込んだ。忘れもしない07年4月27

日、独立記念日の夜、首都の中心部に街灯がともったのだ。それまで真っ暗だった町が一気に明るくなり、それはこの国の希望の光にも見えた。

しかし、それも首都の一角のみ。一般の家庭には、まだまだ電力が届いていなかった。内戦終結後も、発電所は廃墟となり、電柱は銃弾の跡が残った状態で放置されていた。

内戦の原因の一つとなった貧困を減らし、平和の定着を図るためにも、経済成長を支える電力は必要不可欠。そこで手を差し伸べたのが日本だった。今日まで、発電機の供与、配電線の整備など、日本のインフラ整備の技術力を生かした取り組みが進められてきた。



日本の支援で供与されたパソコンで、発電機の運転記録を管理

### やる気を引き出す ベテランの指導

さらに、この国で多くの人に光を届けようと奮闘している日本人がいる。「施設の整備は進んできていますが、実際にそれを動かす人材が不足しているのです」。そう話すのは、長年にわたり、開発途上で電力施設の設計、施工などを手掛けてきた八千代エンジニアリング株式会社の松村昇さんと仁尾正さん。「老いてはますます壮なるべし」。2人とも、70歳を過ぎたベテラン技術者だ。

首都圏の電力供給を担うのは国家電力公社（NPA）。現在、600人ほどの職員がいるが、内戦の影響で技術者の育成が進まず、組織内に技術や知識が蓄積されていなかった。発電機は動かさずはなし。維持管理が十分できておらず、故障も頻発していた。

このままでは電力の供給は安定しない。そこで、松村さんと仁尾さんが中心となり、NPAの職員に対して、発電や配電、機械の維持管理の方法などを指導している。

中でも力を入れているのが、発電機についての講習だ。「初めはみんな機械の図面も読めなかったんですよ」と松村さん。まずは徹底的に基礎をたたきこむことにした。そして次は、現場での実践。



発電機のエンジンに故障がないか調べる方法を伝える松村さん(左から2人目)

シエラレオネ  
from **SIERRA LEONE**

## 平和の明かりをとりたい

約10年間続いた内戦の負の遺産。  
それは、人々の生活を支えるインフラの崩壊だった。  
彼らに平和の明かりを届けるべく、  
日本と現地の技術者たちが奮闘している。



機械を部品ごとに分解し、一つ一つ丁寧に清掃。図面を見ながら、再び組み立て直していく。「あえて失敗する姿も見せませす。それでも挑み続ける技術者の生きざまを伝えたいのです」と、仁尾さんは力強く話す。

2年間の厳しい指導にもめげず、毎日必死に学んできたNPAの職員たち。次第に機械の維持管理をスムーズに行えるようになり、仕事に対する意識も変わってきた。気合いあふれる日本の先輩の姿を見て、「自分もあんなりたい」と、何事にも積極的に取り組むようになってきたのだ。

そんな彼ら自身の努力もあり、この数年、シエラレオネの電力事情は大幅に改善。外を歩けば暗かった町に明かりがつき、家では扇風機が回り、テレビもつくようになった。子どもたちは夜でも勉強できるとうれしそうだ。

「この数年でNPAは変わってきました。でも例えて言うなら、まだハイハイの状態。自分の足で立ち上がるまで支えていきたい」と松村さんは話す。

内戦という暗い過去から立ち上がるようにしているシエラレオネ。その復興のシンボルとも言える平和の明かり。この国の人々の心を照らすべく、彼らの挑戦は続いていく。